

熊雜載

熊

る事甚し、其後其熊の皮を剥ぎ肉を料理て喰ふなり、さて皮は首を正面に向け、耳環をかけ、靈前にかざりおく、前庭には二行に旗幟を建、武具をかざり、嚴重にこそは見へにけれ、祝儀の大酒宴あり、赤熊の肉を肴とし、次に鹿肉、狐肉、魚肉、澤山にして、終日終夜賑ふなり、是を毎秋乙名家豪富の名利とする也、此ときは衣服をあらため、器財寶物を披露し、藝術をもて鳴り、才德器量を輝して、格式をとらん事をはかるとなり、才德爵祿を布くは、此大祭禮の入用を一人にて度々するをもてなるなり、土人此大祭禮を號けてイヨウマンテといふなり、年中海上にて漁獵を無難にするの祝儀なりといふ、日本の大古則斯のごとし、その法遣り農民の秋祭是なり、

〔出雲風土記 意字郡〕凡諸山野所在、○中禽獸則有略、○中熊、○中獺猴之族、

〔夫木和歌抄 熊二十七〕三百首御歌

後嵯峨院御製

あらくまのなれてすむなるしはつ山やまもいかにかはげしかるらん

〔新撰字鏡 連火〕熊彼宜反、平、志久萬、

〔倭名類聚抄 毛群名〕熊爾雅集注云、熊音禮、和名、似熊而黃白、又猛烈多力、能拔樹木者也、

〔箋注倭名類聚抄 獸七名〕釋獸云、熊如熊黃白文、郭注云、似熊而長頭高脚、猛慙多力、能拔樹木、毛詩斯

于正義引舍人曰、熊如熊、色黃白也、則此所引或舊注、郭依之也、猛烈疑猛慙之誤、說文依爾雅、陸璣

疏云、熊有黃熊、有赤熊、大於熊、其脂如熊白、而庖理不如熊白之美也、埤雅、熊似熊而大、爲獸亦堅中

從目、能緣能立、遇人則擘而攫之、爾雅、翼柳宗元、熊說稱、鹿畏、獮、虎畏、熊、熊之狀、被髮人立、絕

有力而甚害人、則熊之力非熊比矣、是條舊○天及伊勢本無、下總本廣本有之、今錄存、

〔類聚名義抄 火〕熊音俾、或、

〔大和本草 十六〕熊獸、本草ニ載タリ、順和名抄シク、マト倭訓ヲ付タリ、上ニ四ノ字アルユヘニシク

マト訓ゼシニヤ、四ハ网ナリ、四五ノ四ノ字ニ非ザレドモ、似タルヲ以稱ス、